2016年3月20日中原教会メッセージ

聖書箇所：ヨエル書2:12-14

　　　　　　　　　　　　　　**「ヨエル　主の慈しみ」**

　本日は旧約聖書のヨエル書からです。ホセア書からマラキ書までを十二小預言書と言います。旧約聖書の替え歌では、“ホセア、ヨエ、アモ、オバ、ヨナ、ミ。ナホム、ハバクク、ゼパ、ハガイ、ゼカリヤ、マラキで39”ということでしたね。その12の預言書のうちの2番目です。“イザヤ、エレ哀、エゼ、ダニル”の4つが大預言書と言われるものです。12の小預言書の並べられている順序は時代順ということでもなく、配列理由はわかりません。ヘブル語旧約聖書でもこの順序です。なかでもヨエル書は独自の性格を持って居ます。これら小預言書は最初のところに筆者とその時代に関する記述があり、預言書成立時期を特定することができるのですが、ヨエル書については、父親がペトエルというだけで時代を特定する記述がありません。しかし内容や、言葉の使用から成立年代を特定する努力がされてきました。まず、ユダヤ王国が滅亡しバビロニアに捕囚された後なのか前なのかと言う点です。両方の説がありますし、その理由ももっともらしいのですが、王国の滅亡が明確に過去の出来事として書かれていないこと、捕囚そして帰還を想像させる明確な記述がみあたらないこと、からして捕囚前とするべきであろう、と考えます。しかし、捕囚前と言っても、BC800年ころのユダ王国のヨアシ王の頃と言う説と、BC600年頃のユダヤ王国滅亡直前とする説があります。北からの脅威について書かれている、と解釈できないではない箇所も見られますが、全体的には国家存亡の危機というような切迫した時ではないようですので、BC800年頃の初期ユダヤ王国の時代の文書という説に組したい、と思います。しかし、その後の記述と考える方が自然である、と思われる箇所もあるため、BC800年頃成立してから、どこかで加筆された可能性はあると思われます。いずれにせよ、BC800年に成立した文書だとすれば、預言書の中で最も古いものとなります。

　さきほどお読みいただいた箇所は2章の中ほどの部分ですが、ヨエル書の全体像を理解するためには1章から3章まで全体を見なければなりません。1:1-2:17まではイナゴによる大被害とそれを「主の日」の前兆と理解するヨエルの預言が語られます。2:18-27まではその被害からの回復の約束です。2:28－3:21の最後までが「主の日」についての預言です。そこには異教の民への裁きを含んでいます。全体を通して言えば「主の日」における裁きと救いに関する預言と言えます。この「主の日」の直前には大自然の恐るべき変動が起きます。それは新約の時代にも受け継がれ黙示録などで表されている終末の日の表現となって行くのです。イエス様も終末の時の状況を若干述べられました。

3節で子供たちにこの預言を伝えることが義務とされています。ヨエル書は最も古い預言書であり、しかも代々伝えることがユダヤ人の義務とされていましたので、ユダヤ人は皆、ヨエル書の中身を良く知っていたはずです。そのため、ヨエル書は旧約聖書のいろいろなところで引用されています。若干の例をあげます。ヨエル書の3:16には「主はシオンから叫び、/エルサレムから声を出される」とありますが、ヨエル書の次にあるアモス書の1:2に全く同じ表現があります。また、ヨエル書3:10には「あなたがたの鋤を剣に、/あなたがたのかまを槍に、打ち直せ」とあります。これは裁かれるべきツロ、シドン、ペリシテの人々に対し、“農具を武器に代え、エルサレムに来い。そこでお前たちは裁かれる”と「主なる神」がおっしゃられるところです。これがイザヤ書2:4では逆に武器を農具に代え、戦いはもうしない、という表現として使用されます。有名な箇所ですのでお読みいたします。「主は国々の間をさばき、 多くの国々の民に、判決を下す。 彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない」とあります。この箇所は別の小預言書ミカ書4:3にもあります。この戦争放棄の表現は、国際連合設立の願いを表現したものとして、国連ビルに掲げられています。戦争放棄は人類の願いである、ということです。しかし、ここで申し上げたいことは、ヨエル書の表現が他の文書の中にしばしば現れる、ということです。引照箇所が記されている聖書をお持ちの方は、ヨエル書のいろんな箇所に聖書の他の文書の引照があることに気づくと思います。いわばヨエル書は預言書の古典とも言うべき存在です。

このことは新約聖書についても言えます。まず最も有名な箇所として、ヨエル書の2:28-32までがあります。お読みします。「その後、わたしは、 わたしの霊をすべての人に注ぐ。 あなたがたの息子や娘は預言し、 年寄りは夢を見、若い男は幻を見る。 29 その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、 わたしの霊を注ぐ。30 わたしは天と地に、不思議なしるしを現す。 血と火と煙の柱である。 31 主の大いなる恐るべき日が来る前に、 太陽はやみとなり、月は血に変わる。32 しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。 主が仰せられたように、 シオンの山、エルサレムに、 のがれる者があるからだ。 その生き残った者のうちに、 主が呼ばれる者がいる」とあります。これがペンテコステの聖霊降臨直後のペテロの演説で引用されています。「使徒の働き」2:17-21までです。「年寄りは夢を見」と「若い男は幻を見る」が前後逆になって引用されているとか、「使徒の働き」では、ヨエル書32節は「主の名を呼ぶ者は救われる」で終わっている、とかの変化はありますが、ほとんどそのままで引用されています。この「主の名を呼ぶ者は救われる」はパウロのローマ書10:13でも引用されています。また、ヨエル書3:13には「かまを入れよ。刈り入れの時は熟した」とありますが、黙示録14:18では、「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから」という形で引用されています。ヨエル書で「主の日」というのはKeyWordといえる言葉ですが新約聖書でも終末の日のこととして語られます。第一テサロニケ5:2、第二テサロニケ2:2-3、第二ペテロ3:10、黙示録1:10の5節に現れます。第一テサロニケ5:2をお読みします。「主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです」となっています。ヨエル書1:15でも「主の日は近い。全能者からの破壊のように、その日が来る」と言っています。ちなみに「全能者」というのは「シャダイ」であり、「破壊」は「ショドゥ」ですのでこの2語はごろ合わせになっています。詩文においてはその韻を合わせるため、このようなことがしばしば行われます。ヨエル書には外に、文の前と後ろをひっくり返して記述し、音楽的表現にするなど詩的表現が数多くあります。おそらくヨエル書はユダヤ教徒の礼拝においてしばしば皆で唱えられたりしたからではないか、と思われます。いずれにせよ、新約時代のユダヤ人にとってはヨエル書は大変親しみのある文書であったと推測されます。

　では1章から見てみましょう。4節にイナゴとバッタがでてきます。イナゴというのはバッタの一種で喉仏があり、それ以外のバッタはこれがない種類と言われています。バッタのヘブル語表現には10種類くらい、あるそうです。新改訳ではこのいなごとバッタが区別されているように訳されていますが、ヘブル語では４つのバッタを表す表現が使われています。「ガーザーム」、「アルベ」、「イェレク」、「ハーシール」の4種です。このうち「アルベ」が聖書で最も良く使われている単語です。語源は「無数」とか「群れ」という意味だそうです。口語訳聖書をみるとこの4種がきれいに訳し分けされています。「噛み食らうイナゴ」、「群がるイナゴ」、「とびイナゴ」、「滅ぼすイナゴ」とされています。要するに徹底的に噛み砕かれてしまう、ということです。イナゴの害と言うのは大変な事の要で、世界の歴史の中でも惨憺たるありさまが記録されています。1915年のパレスチナにおけるバッタ被害が有名です。当時のオスマントルコでは一人20kgのバッタの卵を集めることを国民に義務化して、広がるのを抑えるのに躍起になった、という記事があります。この群れにあったらすべての動物が死滅するとともに、畑の作物も全部やられてしまう、という大変なもののようです。どうもこれがBC800年ころのイスラエルで起きたようです。実は私はむかし、イナゴの佃煮というのを食べ、これが大変おいしかったので、あまり恐怖感はないのですが、集団になって襲ってきたら人間なんかひとたまりもないでしょう。5節で酔っ払いに「泣け」と言っていますが、イナゴの大群でぶどう畑がやられ葡萄がとれなくなったため、葡萄酒がなくなったことをいっているのです。そして6節で「一つの国民がわたしの国に攻め上った」とあります。BC800年ころの状況で言えばアッシリアが台頭してきていた頃です。しかしヨエル書ではまだアッシリアを脅威として叙述しておりませんので、当時しばしば北王国をおびやかしていた、都市国家ダマスコか、フェニキアの都市国家シドン、ツロが想定されるところです。「預言」として記載されていますし、「数えきれない国民」と表現し、「雄獅子」という表現も考慮するとアッシリアのこと、という想定も成り立ちえます。「いなご」は神様の裁きの手段です。イスラエルの民の出国を許可しないエジプトのパロに対しイナゴの大群がエジプトの全土を蓋うという大災害が起こされたことが出エジプト記に記録されています。その後、イナゴは第二歴代誌7:13で主がソロモン王に対し「もし、私が---イナゴに命じてこの地を食い尽くさせた場合」といって神の裁きの一つの手段としてイナゴの大群を送ることが書かれています。ヨエル書でいなごが大量発生し、それで象徴される異国の侵入は神の裁きの表現なのである、ということです。ここに、アッシリヤによる北王国の滅亡、新バビロニアによる南王国の滅亡、新バビロニアに次ぐペルシャによる支配などの場面に置いて異国の王を主なる神が用いてイスラエルを裁く、という聖書における預言書・歴史書の特徴がここに現れていると言えます。このことは大変なことです。古代に置いては、神は民族神ですから、異国の王が自国の神の僕（しもべ）などということはありえません。神々の戦いの結果が王国間の勝敗なのです。イスラエルの信仰は絶対的唯一神ですから、異国の王も「主なる神」の最終支配の下にある、との考えからこのような解釈になるのです。当時のオリエント宗教では大変独自です。もちろんキリスト教における神も同様です。

　8節から主の裁きの下にあるユダヤの悲惨な状態が語られます。「荒布」が8節のおとめ、13節の祭司の所に出てきますが、これは深い悲しみの表現です。イナゴのために捧げものとする穀物も葡萄酒もなくなってしまったのです。12節の最後で「人の子から喜びが消え失せた」とあります。「人の子ら」は旧約聖書でもかなりでてきますが、特別な場合を除き一般的には「主の民」と置き換えられます。主に従う民、ユダヤ人から喜びが消え、ユダヤの国も見るも憐れな地となったというのです。もう「主に向かって叫ぶ」しか手はありません。そしてここで「主の日」は近い、と言われます。いままでのは前兆で、これから「主の日」が起きる、というのです。19節で「主よ、私はあなたに呼び求めます」とあります。20節では「野の獣もあなたにあえぎ求めている」と言っています。主に頼むしか、残された希望はありません。この「主に日」とはいつ起きることなのかについては黙示録の千年王国との関連もありキリスト教の中で諸説があります。要するに、ヨエル書に預言されている「主の日」と主イエス・キリストの来臨、ペンテコステの日、主イエスの再臨の時、との関係如何、ということです。1:15の「主の日」と2:1の「主の日」については「その日は近い」と言われています。2:11の「主の日」は「偉大で、非常に恐ろしい」と言われていますが、文の続き具合からみて2:1の「主の日」と同じと考えなければならないでしょう。これらの「主の日」は全く、主なる神の裁きの時で、ヨエルは「近い」と理解していた、と考えられます。現在の目から見ると、アッシリアによる北王国の滅亡、そしてその時点での南王国のアッシリアの属国化、即ちBC720年頃のことをヨエルは想定していたと考えるのが自然な理解でしょう。「主の日」は3:14にもう一つあります。この箇所は異邦人の国が滅ぼされイスラエルの支配がエルサレム、シオンの丘で再確立される日ですから所謂「終末の日」です。新約の世界では終末の日は主イエス再臨の時です。新約聖書では「主の日」はすべて終末の日であり主イエスの再臨の時です。従って、「主の日」は主の顕現の日であって終末の日には限られないことになります。ペンテコステの直後のペテロの説教で引用されている箇所である2:29の「その日」はペンテコステの時であり、「主の日」である、と解釈してさしつかえなさそうです。更に新約後の教会の歴史の中で主の復活の日、即ち日曜日を「主の日」とする慣行が出来上がって行ったようです。とにかく、ヨエルにとってみればまずもって「主に日」は裁きの時であり、2:12以下の悔い改めにより、イスラエルにとっては救いの日でもあるようになった、と解することができます。

　そして本日の聖書箇所に入ります。2:12には「主の御告げ」という言葉が出てきますが、これは預言を始める時の定例句です。この表現が特に多いのはイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書です。小預言書でも、アモス書8:11に「神である主の御告げ」というのがあります。ヨエル書が預言書のひな形的な存在であったと考えられます。同じく12節に「私に立ち返れ」とあります。これはヘブル語では「シューブ」という動詞で、「戻る」「立ち返る」という意味の単語ですが、「悔い改める」という意味のギリシャ語メタノイヤと訳されることもある単語です。ここから「悔い改める」というのは“神様に立ち帰ること”という理解が生まれたのです。新約的な表現をすると“心をつくし、悔い改めよ”と言っていることになります。バプテスマのヨハネの最初の宣教メッセージを思い出します。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」の「悔い改めなさい」のヘブル語訳はこの「シューブ」です。マルコ福音書1:13のイエス様の最初の福音は「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」の「悔い改めて」も「シューブ」です。

13節には「心を引き裂け」という表現があります。着物を引き裂くのは怒りや嘆きの表現ですが、それを着物ではなく心即ち心臓を引き裂くと言っているのですから、その嘆きの程が知れる、というものです。このような表現は聖書でここだけです。そして「主は情け深く、憐み深く、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるからだ」という「愛の神」が表現されます。これぞ「神は愛なり」そのものです。「情け深い」、「憐み深い」、「恵み豊か」と訳されている語はヘブル語ではそれぞれ「ハヌン」、「ラフム」、「ヘセド」です。これらの言葉は極めて微妙な意味合いをもっており、日本語訳もそれぞれです。口語訳は「恵みあり」、「憐みあり」、「慈しみ豊か」です。新共同訳は「恵みに満ち」、「憐み深く」、「慈しみに富み」です。更にフランシスコ会訳は「恵み深く」、「憐み深い」、「慈しみに溢れ」で新共同訳と極めて近い訳です。新共同訳はカソリックとプロテスタントの共同作業でしたから、フランシスコ会訳をまねたのかもしれません。どうも共通な訳し方はなさそうですが、概していうと、「ハヌン」は恵み、「ラフム」は憐み、「ヘセド」は慈しみに通じている、ということが言えそうです。神様の性質は「恵み深く、憐み深く、慈しみ深い」ということです。この3つの単語の内、聖書に独自の言葉と言えるのは「ヘセド」です。一般的には「慈しみ」と訳されています。「慈愛の神」ということです。「慈しみ」と言うと、神様から人間に向かうことのみ考えがちですが、「ヘセド」の原義は「共同体的義務」であり、統一、連帯、忠誠の意味もあります。イスラエル共同体への忠誠という意味合いです。イスラエル共同体はヤハヴェを頂く共同体ですから、主なる神への忠誠、即ち、信仰ということです。ユダヤ教徒が必ず唱えなければならない祈りにシェマーがあります。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。 5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」と言うところの“主を愛する”ということと同じです。神様は我々を愛するとともに神様を愛することを命じています。それがイスラエルの一員であることの証なのです。

　2:13では神様の性質を表す表現として、更に、「怒るのに遅く」と「わざわいを思い直してくださる」とが挙げられています。「怒るのに遅く」は理解しやすいのですが、「わざわいを思い直してくださる」というのです。神様の決定はもう覆ることはありえない、というのが神様の性質である、と考えるのが通常です。ギリシャの神々のように人間的かつ多数の神々が居る場合、神様が決定を覆してもあまり奇異ではありませんが、イスラエルのような唯一超越神の場合は神様が「思い直す」というのは矛盾するように思えます。ここで「思い直す」ということばはヘブル語で「ナーハム」と言い、そもそもは憐れむ、と言う意味ですが動詞変化のある一つの型は「悔い改める」と訳すことができます。この13節ではこの「悔い改める」の意味で使われているのです。神様が悔いるのです。聖書の神様が思い直したケースはいくつもあります。代表的なのは創世記18章にあるソドムのお話しです。これは神様がソドムを滅ぼすことを決定しますが、アブラハムの“正しい者もいっしょに滅ぼされるのはおかしいではないか”という訴えに神様が答えて条件とする正しい人の人数を50人から10人にまで落としていく話です。結局、10人の正しい者もおらず、ソドムの滅亡が結論となるのですが、この間の神様の思い直しが重要です。なぜでしょうか、「ヘセド」です。神様は人間を慈しんでくれるのです。神様から人間に向かうヘセドです。もちろん、その応答としての人間から神様に向かうヘセドもあります。

私たちも嘗ての自分はいつも神様に「思い直し」を求めていたのではないでしょうか。しかし、主イエス・キリストは私たちの罪を背負ってくださいましたので、もう神様は私たちの罪を見ないことにされたため、神様の側からの思い直しの必要はなくなっています。それは主イエスのヘセドによるものです。私たちは、ヘセドで応答するよう求められています。本日の最後の節は「主が思い直して、あわれみ」と訳されていますが、先程の「立ちかえる」の意味のシューブが「思い直す」の意味で使用され、ナーハムが「憐れむ」の意味の動詞形で使用されています。悔い改める、の意味での動詞形ではありません。以上でおわかりのように、13節でナーハムは「思い直す」の意味で使用され、14節では「憐れむ」の意味で使用されているのです。またシューブは12節はでは「立ち返れ」の意味で使用され、14節では「思い直す」の意味で使用されています。ヘブル語原典のシューブの配列をみると、12節と13節では行の先頭にきており、14節では3つ目の単語として使用されています。同じ意味での使用は同じ場所に置いているのです。技巧的にも工夫された箇所です。

とてもヨエル書すべてを通観することも出来ませんが、ヨエル書の魅力の一端はおわかりいただけたと思います。「ヘセド」だけは心に留めておいてください。祈ります。

（ご在天の父なる神様。今日はヨエル書から学びました。この最も古い預言書の中で、すでに「悔い改め」の真実が述べられていることに驚くものです。また、私たちの父なる神様は私たちを慈しみ、裁きを思い直して下さる神様であることも学びました。主イエスはその仲介者として立てられました。主の十字架の死により、神の慈しみ「ヘセド」が示され、我々が罪なき者とされる、という神様の「思い直し」に感謝申し上げます。どうぞ、私たちをその証人とさせてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります）